

---

# 水龍様の花嫁様

ねむこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水龍様の花嫁様

### 【Nコード】

N5070N

### 【作者名】

ねむこ

### 【あらすじ】

私、水野<sup>みずの</sup> 都<sup>みやこ</sup>が寝てる最中にスウェット姿で異世界に召喚された。その理由が「水龍様の花嫁様になるため」とは。腹が減っては戦はできぬと言っし、まずは腹ごしらえか。

お呼び出し

「げふう・・・」

べちゃつと顔から落ちて変な体勢で漏れた私の声は、17歳の乙女らしからぬものだった。

「おかわり！」

ばーん！と掲げた空のどんぶりを受け取り、この国の大臣の一人であるインテリ親父はせっせと私のおかわりをよそっている。こいつが今回の元凶だ。

人の寝込みを召喚などというもので叩き起こしてくれちゃって、言うにことを欠いて花嫁様たあどいう了見だ、ああ？

ちつと舌打ちして睨みつける。

普段はこうじゃないけど、ここへ来て性格が凶暴になった気がする。

「お待たせ致しました！」

へいこらしながらおかわりを捧げ持つ大臣から満タンになったどんぶりを受け取り、黙ってかきこむ。

宮廷料理だけあって味はまあまあ。ただし一回一回の量が少ない。

なめてんのか？こっちはまだまだ成長途中だっつーの。  
むぐむぐと咀嚼してごっごつとジュースを飲む。

「ぷはーっ！」

どん！とコップをテーブルに叩きつけるように置くと、インテリ親父をはじめ広間の奥に控えていた他の大臣たちもわずかに跳び上がった。

片手でさつと長い髪を後ろに払って全員を見渡し、鼻の頭に貼ってあった絆創膏をぴつと剥がす。

「それじゃあ詳しく聞かせてもらおうかしら？」

一段どころか何段も下にいる人たちを見下ろして、スウェット姿でどっかりと長イスに寝そべる。

唇の端をわずかに吊り上げ、きつめにインテリ親父に視線を合わせると、即座に目を逸らして忙しく汗を拭きだす。  
しばらくして、やっと口を開いた。

「そ、その、た、大変申し上げにくいのですが・・・」

ももごと口ごもる大臣を一睨みする。目が合っていないインテリ親父には効果がなかったが、奥の人たちには効果があった。

「……………ひっ！……………」

短い悲鳴とさらに団子状に身を寄せ合う様にイケナイ何かに目覚めそうになる。

ちつと舌打ちをすると、インテリ親父が気づいたらしく焦ったように顔を上げた。

「あ！あなた様を水龍様の花嫁様にするために召喚いたしただい  
でありますっ！！」

はあはあと肩で息をしながら、インテリ親父は一息で叫び終えた。

「ふうん。で、その花嫁様ってのは一体何をするの？」

にこーっと笑って言えば、広間にいた全員がすごい勢いで壁に張り  
付いた。

どうしてここまで怖がられるのかわからなかったが、これはこれで  
実に面白い。

自然とにやあっという笑みに変わって、ついに失神者がでた。

だから何でだっつーの。

「は、花嫁様は花嫁様です！特に何もすることはありません！ただ  
じっとしていて頂ければ！！」

ははーっと低頭して喋ったのは別の大臣だった。

ヒゲが立派なのでヒゲ大臣と呼ぶことにする。

最初に名乗られたけどそんな長い覚えられるか。

「そんな簡単なことならどうして私なんかを召喚したのかしら？こ  
の世界にも女性はいるでしょう？」

ついつとヒゲ大臣から端のほうにいる女性に視線を移す。

目が合った途端、顔を真っ青にして俯いてしまったけど、あの豊か  
な体つきが男だとは言わせない。

ぼんきゅっばん！な体を上から下まで見回してヒゲ大臣に視線を戻  
した。

「そつ！それは・・・！」

頭を上げ拳を口の前にして、あわあわと口を開いたり閉じたりしていても全く可愛くない。

ちつと舌打ちをすると、びくつとしてから再び低頭する。

「こ、この世界の人間ではその、少々問題がございまして・・・」

徐々に尻すばみになる声でも聞き逃せない一言を聞いた。

問題？

それを聞こうとしたとき、微かな頭痛がして急激な眠気に襲われる。こいつら、薬盛りやがった・・・

「ですがコルウェン大臣、今回の花嫁様は大丈夫でしょうか？」

「そうですね。こんなに力の強い方は今まで召喚した中にはいらっしやいませんでしたもの。」

「いや、この睡眠薬は強力だ。二日くらい余裕で眠っていただけはずだ。」

「それなら良いのですが・・・万が一、水龍様が来られる前に目が覚めたりなどすれば・・・」

「貴公たちは心配性だな？託宣では水害が起こるのは明日だ。どん

なに早くともそれまでに目が覚めることなどありえんよ。」

「・・・そう、ですね。」

「では、あとは水害が起こった後に水龍様をお呼びするだけですな。」

「

「ああ。」

「ええ。」

暗闇の中で気がついた。

体育座りの体勢で何時間眠ってたのか知らないが、関節が固まって体を動かすのが少し痛い。

ちつと舌打ちして、そのへんを蹴りつけたり叩いたりしてみる。

少し余裕があるくらいの木箱で、結構しっかりした作りみたいだ。

葉盛ったり閉じ込めたり、こんなの花嫁に対する仕打ちじゃないっつーの。

天井部分をコンコンと叩いてから押し上げる。

釘などで打ち付けられてたら終わりだ・・・が、予想外に軽く持ち上がった蓋をそのままにして立ち上がる。

あたりは満月の光を浴びて明るく、森に囲まれた湖面がきらきらと輝いてとても幻想的な様子だった。

今ならファンタジーも信じられる気がする。

蓋を頭の上に持ち上げたまましばらく見惚れていると、右手の茂みから乾いた音が聞こえてそっちを振り向いた。





## 花嫁の真実

茂みの奥からふらふらと現れたのは一人の色白な青年だった。

木箱の蓋を持ち上げたままの私の姿が見えていないのか、ぼんやりしたままこっちに歩いてくる。

水色のひらひらとした丈の長いワンピースのようなものを着ている10代後半から20代前半の彼は裸足だ。

まさか変態か。いや、もしかしたら健康に良いと思ってやってるかもしれないし、私も裸足だし。

それに裸足くらいなんだ。きつとこういうのを美形っていうんだ。でこの真ん中で分けた、さらさら流れる薄氷色の髪は足首まであるけど不気味じゃない。

目の前まで来た異様に整った顔をまじまじとじつくりとこれでもかと思つめる。

やっと気づいたのか、夜の湖面を思わせる藍色の瞳が自信なさげにゆらゆら揺れて

「い、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!!」

はうはうと半泣きで後退しながら謝ってくる青年の左腕を、蓋をぱいっと放り出してしっかりと掴む。

「何を、謝るのかしら?」

ん?と顔を近づければひいっ!と冗談のような悲鳴を上げてしゃがみ込む。

この世界、ほんとどうなってるのか知らないけど人を化け物みたいな目で見るとじゃないわよ。まったく。

青年の左腕を掴んだまま木箱から片足ずつ出て、彼の前に同じようにしゃがむ。

口元で握った右手の影で、あうあうと口が開いたり閉じたりしている姿は・・・断然可愛い。

ヒゲ大臣なんて思い出したくもないけど、目の前の彼は比べ物にならないくらい可愛い。

凝視しながら覗き込むと、ぺたんと尻餅をついた彼がぼたぼたと涙を流してえぐえぐ言ってる。

これじゃあイケナイ何かに目覚めても誰も何も言えないって。

少しでも呼吸を乱してさらに近づくと、彼もわずかに後退しながら緩く首を振る。

「い、生贄な、んていりつ、ませ、んからっ、帰って、くださっ、いつ・・・」

ぐしゅぐしゅ目を擦りながら嗚咽を漏らす。

その中でとても重要で聞き逃してはいけないキーワードを聞いたような気がする。

「ねえ。私は水龍様とかいうの花嫁らしいんだけど、生贄って、関係ある？」

うふつと笑って聞くと、青年が慄いたように仰け反って目を見開く。驚きすぎたのか、最後の涙が一滴伝うとひつくと肩を揺らして泣き止んだ。

「いつ、生贄のことっ、を、にんげ、んは、花嫁、って、呼ぶ・・・」

涙は止まったものの、しゃくりあげながら喋る姿に 萌える！  
再びはあはあしながらゆっくりと近づく。

「その生贄をいらないって言うあなたは、水龍様なのね？」

違うつて言っても構わない。

それに確信のようなものもある。

湖の近くに現れた、こんなに青系で揃った色使いの美形が一般人でいいわけがないのだ。

へっへっへ、と舌舐めずりする。

「そ、そうです！ごめんなさい！下っ端の水龍でごめんなさい！生きててごめんなさい！！」

んぐんぐと再び泣き出し、服と髪に邪魔されてうまく後退できない水龍様。

たままない。

本能と理性の天秤が、拮抗する間もなく傾いた。  
本能の方に。

お皿の底が土台にめり込むくらいの勢いで。

「それじゃあ私が水龍様の本物のお嫁さんになってあげるね？」

腕を放し、にこにこしながら華奢そうな水龍様に飛びつく。

一瞬ほかんとした水龍様が、骨折もぐえつとか間抜けな悲鳴も上げずに反射的に抱きとめてくれた。

座ったまま呆然としている水龍様の目元に残った涙をぺろつと舐めとる。

特にこれといった味はしなかったが、くすぐったそうに身を擦った

水龍様は超絶可愛い。

でもすぐに何をされたのか気づいたみたいで、ぼつと首まで赤くなつた。

「あ、あの、その・・・」

遠慮がちに離れようとする水龍様にしっかりと抱きついてにこつと微笑むと、そわそわとあたりに視線を彷徨わせながらまたも涙目になる。

やっぱたまんない。

こんな可愛い水龍様を放つとくなんてできるはずもない。

そこで気になるのが生贄の存在だ。

どんな存在で何回接触したのか。

水龍様の胸にすりつきながら考える。

まさかエロ方面じゃあるまいな。

「ねえ水龍様？」

笑って見上げると、水龍様がどきまぎしながら赤くなった。

「え、と、あの・・・僕、そんな様をつけてもらえるようなものじゃ、ないから、その・・・」

ちよつとだけ俯いてもじもじとしながらそう言つと、ちらつと下から見るようにしてからさつと目を逸らす。

「ぼ、僕のことばリルって、その、呼んでくれたら・・・」

こつちを見ないようにしてるリルの赤いほっぺに手を添える。

「リルかあ、可愛くてあなたにぴったりね。私は都、これからよろしくね？」

少しだけ背筋を伸ばしてリルのほっぺに軽く触れるだけのキスをした。

とたんにさつきより赤くなってわたわたしているリルは、やはりエロ方面に疎いのではなからうか。

「それでね？リルにとって生贄って何？ないと困るものなの？」

やっぱり生贄＝食事？

生贄を食べるのかどうするのかなんて知らないけど、食事以外でリルに近づくものは排除しよう。

女性は特に念入りに。

骨の髄まで後悔するくらい。

左の人差し指でリルの胸に渦巻きを描きながら、拗ねたようにちらっと見上げる。

目が合った瞬間、真っ赤な顔でぎゅっと目を瞑ったリルが両腕を掴んできてそこから離そうとする。

でもね、これくらいで私が離れるわけないでしょ？

はうはう半泣きになりながら真っ赤な顔を逸らしているリルを見て顔がにやける。

「い、生贄は、その、人柱のようなものなんだ。水害が起こったときに、水龍が鎮めるための・・・」

徐々に腕の力を緩めて、どこか落ち込んだようなリルもそれはそれで頭を撫で回したいくらいに可愛い。

それにしてもリルの言う通りならリルは今回の生贄、つまり私を食べるかどうにかして水害を鎮めなければならぬのでは？

「じゃあ・・・リルは私を食べて、水害を鎮めるのね？」

寂しそうに尋ねると、う、と詰まったりリルがちらつと視線を向けてくる。

何？隠し事してるなら後で酷いよ？

「その、ミヤコは食べない、よ。僕は生贄なんか、食べたくないんだ・・・」

「でもそれじゃあ水害が・・・」

「うん。だからその水害が起こる前に止めにきたんだ。」

そつと立ち上がろうとするリルから下りて、一緒に立ち上がる。

満月の下、リルの視線が夜の湖を見つめ生温い風が吹き抜けると私の緊張感も一気に高まった。

大きな湖の中心で、最初は静かに、そしてどんどん多くなる泡がたてるブクブクという音がここまで聞こえてくる。

湖の中心が泡ごと盛り上がり、黒くうねるようにしながら持ち上がっていく。

その塊が巨木ほどの高さに達したとき、天边から水を割りながら一つの影が現れた。

それに対抗するように、リルも風をまとして水龍の姿に戻っていく。東洋の龍のように細長い体に艶やかで滑らかな氷のような水色の鱗角はガラスか氷でできているかのように青く透き通り、たてがみは薄氷色で黒い縦長の瞳孔を持つ目は藍色だった。

耳と思しきところは大小の氷柱のようなものが幾重にも扇状に広がっている。

ここで初めて私はファンタジーを信じた。

湖の上に浮かぶ、一匹の小さな飛び魚と3mほどの水龍を見て。

『もうやめるんだ!』

リルの必死の説得が始まる。

『はん!止められるもんなら止めてみやがれ!その大きさ、生贄も食ってねえんだろ?この激弱水龍が!!』  
『なっ!?!』

な!るほど。喋る飛び魚のおかげで理解した。  
つまり生贄を食べないと水龍はとて弱いのか。  
でも生贄ってどうやって選ばれる?選挙か?召喚か?

『お前が食わねえなら俺が食ってやらあつ!!』

ぎゅんとすごいスピードで迫ってきた小さな飛び魚を見て、リルが焦った顔をした、ように思う。

『逃げて!ミヤコ!!』

顔色が変わったようなリルを見て、目前に迫った小さな飛び魚を見る。

拾っておいた木箱の蓋をその横つ面に叩きつけると、木箱の蓋に負けた小さな飛び魚は綺麗な直線を描いて地に落ちた。  
ぴくぴくしている飛び魚を拾い上げ、木箱に入れて蓋をする。

『・・・えーっ!!?』

やはり生贄はそれなりに力があるものが選ばれるようだ。  
水害を阻止したことにより、私がリルに食べられる理由が完全になくなったわけだから・・・  
にやりと小さく笑って、後ろで驚いているリルを振り返る。

「リル、大丈夫? 怪我はない?」

心配げに空中に浮いているリルを見上げると、ふわっと人の姿になったリルが傍に駆け寄ってきた。

「僕のことよりもミヤコの方が危なかったんだよ!？」

「うん、とっても怖かった・・・リル・・・」

リルの胸に縋りつくと、少し迷ったらしいリルの手にそっと抱き締められた。

顔をうずめて、にやあつと笑う。

やはり愛は種族の違いさえ簡単に凌駕するのだ。

「リル、これから一緒にいてね?」

「う、うん。ミヤコは僕が守るよ・・・!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5070n/>

---

水龍様の花嫁様

2011年2月4日04時18分発行